

## ある土瓶の話

皆様ご存知のとおり、西都原考古博物館は西都原古墳群はじめ南九州の古墳時代をメインテーマとする博物館であるが、今回はあえて近世考古学の話題をひとつ。

現代社会では、政治問題が経済面へ影響を及ぼすという事態がしばしば見られる。国家間の関係が悪くなると、政府による貿易規制のみならず、住民感情の悪化によって相手国の商品に対する不買運動が引き起こされるということも珍しくはない。ところで、近世における日向国は諸藩の領域が複雑に入り組んでおり、その中で仇敵とも言える関係の藩どうしが隣接するという状態が起こっていたが、近年の発掘調査の結果から、そこには興味深い関係が存在したことが分かってきた。

日向国の南部を占めるのは、伊東氏の飢肥藩と島津氏の薩摩藩であるが、伊東氏にとって島津氏は戦国期に領土を失うきっかけを作った張本人であり、近世に至っても藩境を巡る争論が起こるなど摩擦の火種は絶えなかった。平常時にあっても互いを仮想敵と見なしており、薩摩藩は境目の番所で、人や物資の往来を厳しく取り締まっていた。両者の関係は近世を通じて良好とは言えず、むしろ常に緊張関係にあったとしても過言ではなく、物流はそれほど活発でなかったイメージがある。

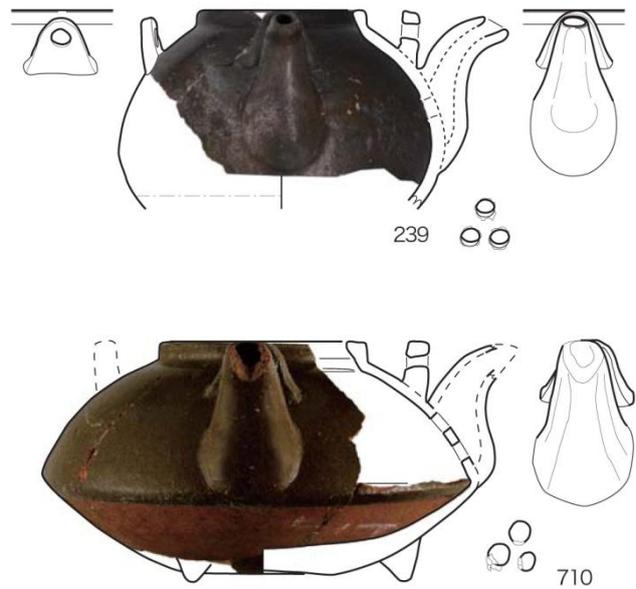
ところが、飢肥藩の上級家臣屋敷地で実施された発掘調査では、様々な産地からもたらされた陶磁器が多数出土する中、こと土瓶に関してはほとんどが薩摩焼であることが明らかとなった。土瓶とは球形あるいは算盤玉のような形の胴体に注口の付いた容器で、底には三足を備えるものが多い。底に煤がこびり付いている場合もあり、囲炉裏などで直火にかけることがあったようである。ちょうど、現代のやかんのような使われ方である。日向国では肥前国や関西地方の土瓶も商品として流通しているにもかかわらず、それらを意識的に選択するような行為は認められない。薩摩焼の土瓶は特産品として日本全国に広く流通していたため、それらが薩摩藩の焼物であることを知らないとも考えづらい。政治的に重要なポジションを占める上級家臣でさえ、仇敵の輸出している商品を積極的に購入しているということだ。

上記のような現象が起こる背景に何があったのか、現時点で断定することはできない。例えば、時期によっては両藩の関係が小康状態にあったのか、政治と日常生活とは別物という割り切りがなされていたのか、はたまた本意ながらも薩摩焼が最も生活様式にマッチする製品であったのか・・・できることなら当人に会って聞いてみたいものである。

(堀田孝博)

参考文献

- 二宮満夫 2013 「飫肥城下町遺跡出土の薩摩焼について」『からから』No.27 鹿児島陶磁器研究会  
堀田孝博 2013a 「飫肥藩領における薩摩焼の流通」『からから』No.27 鹿児島陶磁器研究会  
堀田孝博 2013b 「隣人からみた薩摩焼 近世日向諸藩における薩摩焼流通の位相」『鹿児島考古』  
第43号 鹿児島県考古学会  
宮崎県埋蔵文化財センター 2012 『飫肥城下町遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第220  
集  
渡辺芳郎 2006 「近世薩摩焼の藩外流通に関するノート」『金大考古』第53号 金沢大学考古学研究室  
渡辺芳郎 2012 「近世薩摩焼の生産と藩外流通」『江戸遺跡研究会会報』No.133 江戸遺跡研究会



近世後半期の日向国

(堀田 2013b、原図は『宮崎県史』)

諸藩の領域が複雑に入り組んでいる

薩摩焼の土瓶 (宮崎県埋文セ 2012)

どちらも飫肥城下町遺跡の発掘調査で

出土した